

天草本平家物語における主格表現

—格助詞「の」「が」を中心に—

吉 川 嘉 和

一、序

世に「天草本平家物語」と称される一書は単行本ではなく、Eggo no Fabulas (伊曾保物語) / Moares Sarcasas (金句集) と三部一冊に合綴され、原本は大英博物館の所蔵になる、天下の孤本である。内容は、我が国の「平家物語」をローマ字表記の口語体に抄訳したものであり、抄訳者は緒言によれば不干ハビアン (H. B. I. A. N.) なる、我が国のキリシタンの先達である。抄訳年時は緒言の末尾に「時に御出世。一五九二」と明記されている。和暦の文禄元年に当る。抄訳の目的は扉紙に「日本のことばと *Portugues* を習ひ知らんと欲する人のために世話にやはらげたる平家の物語」とあり、ヤソ会開板の辞にも、「且うはことば稽古のため、且うは世の徳のため」と記されているところから、渡来した外国人宣教師たちの日本語学習と日本歴史の知識習得にあったと推定される。

また、「兩人相對して雑談をなすがごとく、ことばのてにはを書写

天草本平家物語における主格表現 —格助詞「の」「が」を中心に—

せよ」というハビアン註の師の命に従い、「天草本平家物語」は、語り手の喜一註検校と聞き手の右馬之允との対話形式で物語が進行する。この点が、抄訳の原拠となった、所謂「平家物語」の構成と大きく乖離しているのである。しかし、語り手と聞き手が登場し、しかも話題が主従関係の厳格な武家社会の興亡註に纏わるものであるだけに、国語学的には中世における待遇表現研究の好個の資料として多大な貢献をした。また、

さらに、「伊曾保物語」その他のキリシタン資料に等しく言えることであるが、ローマ字によつて日本語が表記されていれば、特異な性格を有する国語資料となり得、事実、国語史、とりわけ音韻史研究に大きな功績を残してきた。中世語の音韻はキリシタン資料を抜きにしては語り得ない。ただ宣教師たちの使用した日本語ローマ字綴は、ポルトガル語におけるローマ字の発音に基づいており、今日の所謂ヘボン式を改変した綴り方とはかなりの相違がある。従つて

キリシタン資料のローマ字綴から当時の国語音韻を推定する場合には、今日のローマ字音に対する意識を一度、払拭する必要がある。さらに厳正を期するならば、ローマ字表記と言えども、それが文字である以上、いくら表音主義を原則としても音そのものではあり得ない。また一音一表記の原則を破り、同音に対して二種以上の表記法が併用されていることも夙に指摘されている。^{注6}従ってキリシタン宣教師たちが考案したローマ字綴が、中世の国語音韻と正確に対応しているとは断言し得ない。ただ漢字仮名交りの国字体と比較すれば、ローマ字表記の方が表音的性情が強いものであるだけに、音韻研究に寄与することは論を俟たない。

周知の如く、室町から江戸初期にかけて、日本語は近代語としての諸特性を具現するのであるが、その一つに格関係の明示が挙げられる。語と語との関係を認定し表現する機能は、日本語の場合、いわゆる格助詞が担っている。「天草本平家物語」で、格表示の顕現していく過程と、待遇表現との関連を見る場合、格助詞「の」「が」の様相を明らかにすることがその一環として考えられる。その際、忘れてはならないことは、「天草本平家物語」とその抄訳テキストとも言うべき原拠本との対応関係である。「の」「が」両助詞の天草本での用法には、原拠となった古典平家の影響が想定されるからである。そこで、以下、原拠本との対比を試みつつ、「天草本平家物語」の格表現、特に「の」「が」を中心とした主格表現について論じ、本書の待遇表現、ひいては中世における待遇表現体系研究の一步としたい。

二、「天草本平家物語」における

人名に承接する「の」「が」の分類

主格表現と待遇表現の関連を考察することが本稿の目的であるので、ここでは先ず、人名に承接する「の」「が」の分類を行なう。

「天草本平家物語」(以下「天草本」と略す)に使用された主格表示の「の」「が」の各巻における分布は付表1の如くである。両助詞の比率は、「伊曾保物語」に比較しても大差はない。即ち「が」「の」の二倍強の割合で使用されている。^{注7}

また、清瀬良一氏は「天草本」の巻四には、「全般的に逐語訳がかなり目立ち、ある種の文語的な語詞が偏って見られるなど〈平家〉の表現面と密着した文の運びになっている」と説き、従って「口語資料としての価値はむしろ前半の部分の方が高い」と指摘されているが、「の」「が」両助詞の分布状態は、むしろ「天草本」の巻一に「の」の出現率が高い。この特色には、文語体の詞章を世間一般の口語体に翻訳する場合に、語形変化のない、従って他の語句に移し変える機会の少ない助詞のことであるから、原拠としたテキストの影響が想定される。事実、付表2に示す原拠本での「の」「が」両助詞の分布を見ると、「天草本」の巻一の原拠本と目されている寛一本平家の巻一から巻三までは「の」の出現率が高い。このことと原文の「の」を「が」もしくは他の助詞に代替する態度の不確実さも手伝って、口語的色彩の強いとされる「天草本」の前半、殊に巻一に、他の巻よりも「の」の出現率が高いのであろう。勿論、その際、原拠本で

の「の」が全て「天草本」にそのまま移されたのではなく、「が」その他の助詞と交替している例もある。しかし、原拠本「の」がそのまま「天草本」「の」へと、無変化で口語訳されたケースが多かったと推定されるのである。

次に、「の」「が」の下接語句を分類すると、両助詞の文機能上の差が明瞭になる。主格「の」「が」に対応する述語部分は動詞と形容詞が殆どである。これは両助詞とも同様の相を呈する。しかし「が」が承接した主語に対応する述語部分は、言い切り、仮定、引用を導く表現などであるのに対し、「の」助詞に対応する述語部分は、

●人の見まらする時は、^{注12} 殊数つまぐらせられ、(巻四第二十六P389)

●義経はさだめて謀叛の心もあらうず、勢ども^{注13}のつかぬ先に討たうと思ふ。(巻四第二十四P374)

などの様に、大半が活用語の連体形であり、いわゆる従属句を構成している。従って、結局は連体格用法に帰するとも言える。主格「の」助詞三六六例中、一三七例が従属句を構成し、連体修飾節中の主格表示としての機能を果しており、その他の用法も、

●鎌倉殿のまづお使ひに佐々木は何ととたづねさせられたれば、(巻四第二P237)

の如く、話し手の所謂、待遇意識によって「の」が選択されたと思われるものがあり、純粹な交換能上の主格「の」の用法はさらに限定されるのである。ただ、「の」助詞が言語主体の待遇意識によって用いられているのか、従属句にあつて連体修飾節の主格を表示する

天草本平家物語における主格表現 — 格助詞「の」「が」を中心に —

という文機能上の要請であるのかの判別は非常に困難であり、個々の事例に徹して考えねばならない。そこで、以下、「天草本」で如何なる人物が「の」で主格表示され、また「が」で表示されるかを分類する。

言語主体が表現しようとする対象の人物に対してどのような感情を抱き、それをどのような言語表現として表出するかを、一般に待遇表現と呼んでいるが、言語主体の待遇意識は、対象人物をその人物独自の名称、即ち固有名詞で表現するとき、最も鋭敏になる。そこで先ず、「天草本」の固有名詞、乃至固有名詞的な表現の分類を試みる。ここでいう、「固有名詞的な表現」とは、例えば、頼朝を「鎌倉殿」、平宗盛を「大臣殿」と呼ぶ類のものである。

(1) 主格表示が「の」専用であるもの。^{注14}

- 関白殿(1)、浄憲(1)、清盛(6)、少将(6)、宮(高倉の宮)(3)、池の大納言(1)、新中納言(3)、池の尼御前(2)、法皇(3)、主上(2)、忠度(1)、建礼門院(2)、四の宮(1)、三の宮(1)、院(2)、能登殿(1)、入道(1)、先帝(1)、蟬丸(1)、中将(1)、重衡(2)、故中の御門(1)、大臣殿(3)

以上であるが、これらはいずれも、皇室関係、公卿、權威ある武家に属する。いわば社会の支配層にある者たちである。彼等の動作には、

●清盛の召しつかはる禿とさへ言へば、道を過ぐる馬、車もよけて通し、(巻一第一P12)

●溝のあつたを宮のいかにも軽うざつと越えさせられたれば、(巻

二第2P109)

の如く、「るる」「らるる」「なまざる」「させらるる」等の敬語助動詞、「おしやる」「ごぞる」などの敬語動詞が併用されている。そして、これらの動詞、助動詞には敬意が含まれるといつても、それには度合があると言われ、また、会話引用の尊敬の動詞、例えば、「仰せらるる」「いはるる」などには「天草本」において分布範囲を異にする現象が見られるという報告もある。^{注16}

右の特徴と、ここで問題にしている「の」との関係を考えてみると、「の」助詞は、「話しことば及び書きことばにおいて低い程度の敬意を示す」と「ロドリゲス大文典」に説明が付されている。「るる、らるる、おん、又はお……ある」及び「話しことばにおいて最も高い程度の敬意を示す」とされる「なまざる」を随伴する述語相当語句に対する主語に承接しており、この点、「の」に敬意が含まれると言つても、その敬意にはかなりの幅があったものと解せられる。さらに、そのような「の」の位相的な広がりを限定し、主語に立つ個々の人物に応じた待遇は、「の」に下接する動詞や助動詞の組み合わせによつてなされていたと思われる。その証拠には、前記入名グループ中、「宮、法皇、主上、四の宮、三の宮、院」など主に皇室関係者に用いられる「させらるる、なまざる、せらるる、せらるる」など「話しことばにおいて最も高い程度の敬意を示す」一連の語句と、「関白殿、淨憲、清盛、少将」など公卿、武家に頻用される「る、らる」「(口氏文典によると、その敬意は低い)とでは一応の使い分けがある。要するに、「の」に敬意が認められるということは、現実には即して言え

ば、敬意を含んだ接頭・接尾語、動詞、助動詞などが用いられている文脈の主格表示を担当しているということである。そして、実際の敬意は動詞を始めとする詞の表現ないし、尊敬の助動詞を主とする辞的表現に託されていると解すべきであろう。

ところで、「天草本」においては、「の」十尊敬表現のパターンにも社会的位相による区別があることを指摘したが、その規範意識は、

● されば大臣殿のわるびれさせられたもことわりぢやと申してこ

そ恥をば少し助けた、(巻四第二十一P362)

の様に、皇室関係者特有の表現形式が宗盛にも使われているところをみると、必ずしも厳密なものではなく、多少の出入はあつた様である。さらに極端な場合には、天皇や権勢ある者と言えども、言語主体の感情価値の変動によつて、「の」とあるべきところが「が」に代えられる場面も出てくる。次の例がそうである。

● まことに昔から今まで、関白殿ほどの人がこのような目にあは

せられたことは聞きも及ばぬことぢや、(巻一第二P17)

小林好日氏はこれを例証として、「主語に附く「が」には卑下の意味はない」と説かれたが、^{注17}狼籍を受けた関白が言語主体(ここでは語り手)から「が」で表現されたとして、そこに特異な待遇意識を認める方が妥当である。表現しようとする対象が同一人物であつても、表現者側からの感情価値に変化をきたせば、「の」から「が」へという待遇の低落が見られるのである。管見に入つたものでは、前例と類似の表現に、

● 昔も堀川の天皇と申したがこのやうにおびえさせらるることが

あつたに、(巻一第八P141)

が挙げられる。「が」が直接、「天皇」に下接していないうらみは存するが、「と申したが」全体に待遇意識の低下が感じられる。従つて「の」が期待される主格表示が「が」となっているのは、場面の特殊性に起因するのであり、そこには言語主体の待遇意識の機微が看取できるのではないか。

以上、「天草本」の固有名詞のうち、「の」で示される例を検討してきたが、要約すると次のようになる。

- 一、「天草本」において「の」専用で主格が表示されている人物は皇室関係、公卿、権威ある武家といった社会の支配階級である。
- 二、さらに「皇室関係」と「公卿、武家」では、述語部分において尊敬表現が区別されている。
- 三、しかし、その規範性は絶対ではなく、表現者の対象認定に変化が生ずれば、評価に応じて「の」が「が」に低落する場合もあるし、随伴する尊敬表現がより高度になる場合もある。

(ロ)主格表示が「が」専用であるもの。

蘇武(1)、信俊(2)、貞能(2)、行綱(1)、西光(1)、有王(3)、康頼(1)、松浦小夜姫(1)、仏御前(3)、競(1)、長兵衛(2)、飛驒の守(1)、唱(1)、黒田(1)、忠清(2)、上総の守(3)、浄妙(1)、但馬(1)、佐竹の太郎(1)、実盛(3)、長茂(1)、木曾(7)、行家(4)、景高(1)、覚明(1)、有国(1)、兼平(6)、重能(1)、兼康(2)、頼経(1)、鼓判官(1)、塩谷(1)、勅使河原(1)、畠山(1)、越中の前司(1)、人見(3)、能合(3)、河原太郎(1)、平山(4)、伊豫の河野(1)、土肥の次郎(1)、成田(1)、樋口(1)、弟の

天草本平家物語における主格表現——格助詞「の」「が」を中心に——

七郎(1)、足利の又太郎(1)、六代(1)、政時(1)、宗茂(1)、千手(1)、在原の業平(1)、義盛(1)、教能(1)、右衛門の督(1)、堀(1)、梶原景清(2)、越中の次郎兵衛(1)、伊勢の三郎(1)、景経(1)、那須の与一(1)、弁慶(1)、清原の深養父(1)、昌尊(1)、佐々木(1)

「が」で主格を表示されている夥しい人物は、その大部分が下級武士である。その中には謀叛が暴露して処刑された行綱や、主人に忠誠を尽した信俊・有王、討死した兼平、流人となった康頼、狼藉者としての木曾、名譽ある功を立てた那須の与一など、種々様々な群像がうごめいている。彼等の行為を示す動詞には、尊敬の意を添える助動詞は使用されず、接頭、接尾語、その他の語句による尊敬表現も見られない。大概は「参る」「申す」などの謙讓語が使用されるか、常体の動詞が使用されるかである。その動詞も、会話引用を示す「申す」を除けば、

●宮のおん方には大矢の俊長、五智院の但馬などが射る矢は鎧も、盾もたまらずくとぬけた。(第二巻第五P126)

●そのうちに敦盛をば熊谷が討つてござる。(巻四第九P276) などの「射る」「討つ」の様な合戦の躍動感を伝える語が多い。

しかし、文脈から判断する限り、かかる場合の「が」には積極的な軽率感もまた読み取れない。ここには語り手からの特別な待遇意識が反映しているとは考えられない。いわば、待遇的には無色の、従つてそれだけ近代語的な主格助詞としての色彩が強いのである。

このような一般的傾向に対し、言語主体の待遇意識が比較的顕著である用例は、上記人名のうち、木曾と康頼の場合である。

●あはや木曾が参るぞ何たる悪行をかつかまつらうずらうとあつて、君も臣も恐れをののかせらるるところに、(巻四第三P238)

このような「木曾が」の例、七例とも木曾の狼藉を受けた敵や被害者、及びそれを語る側からの表現であり、彼等の木曾に対する、敵意・憎悪・恐怖などの感情が反映されていると考えられる。

康頼の場合は、

①少将の取つて見らるるにも、康頼が読むにも二人とばかり書かれて三人とは書かれなんだ。(巻一第十P74)

②少将のかたみには夜の衾、康頼がかたみには一部の法華経をとどめおいて、(巻一第十P75)

の如く、鬼界が島に配流された少将と康頼の名前を相對して挙げ、二人の階級差を明示する意図が感ぜられる。上記二例は、覚一本平家では、

①少将のとつてよむにも、康頼入道が読けるにも、(大系本P214)

②少将の形見にはよるの衾、康頼が形見には一部の法花経をぞとどめける。(大系本P215)

とあり、二例とも「の」「が」の使い分けが一致している。従つて、口訳の際に、原拠としたテキストから影響を受けたとも考えられるのであるが、「少将のと(ツ)てよむにも」が「少将の取つて見らるるにも」と「るる」という尊敬の助動詞が添加されて口訳されている点や、前述した様に、「少将」が主語に立つ場合には「の」が専用

されている点を考え合わせると、口訳者の待遇意識も流入していると思われる。

一般に「の」に積極的な尊敬の意識を求めるより、「が」に卑下感を求める方が容易なのであるが、「天草本」の場合、木曾の例や、少将と康頼を併記する例を除き、「が」に明確な待遇意識を見ることは困難である。即ち、大局的には「天草本」の「が」は、感情価値に従うよりも主格表示という文機能上の要請に従っているのが殆どであると言える。

(イ)主格表示が「の」「が」に渡っているもの。数字は順に「の」「が」の例を示す。

重盛(3・4)、宰相(4・1)、成親卿(4・1)、俊寛(1・1)、妓王(1・3)、仲綱(1・2)、文覚(2・1)、頼朝(衾・鎌倉殿)(7・2)、維盛(1・1)、木曾殿(6・3) 猫殿(猫間殿)(1・1)、義経(3・3)、平大納言(1・1)

以上であるが、これらの人物の社会的位相は必ずしも一定の水準を示すものではない。また「の」「が」両助詞が併用されている理由も一定とは思えない。そこで以下、逐次、用例を検討していく。それによつて、これらの人物が本来「の」で遇すべきと見られているのか、逆に「が」で遇すべきと見られているのか、あるいは、そのような規範的、形式的な意識や枠組を想定し得ないのかが明らかになると思うからである。

○重盛

①重盛の申されたは、これは少しも苦しい儀ぢや。(巻一第二

P15)

②重盛のさまさまに申されたゆゑぢや。(巻一第七P55)

③重盛のあれはわが命に代つた者の子なればとあつて、ことに御不便を加へられて、(第四第十四P313)

④重盛がかへり聞かうずるところをば、何とてはばかるまいことは？(巻一第四P33)

⑤ただ今重盛が申したことをば汝ら聞かぬか？(巻一第六P49)

⑥重盛が身にかへて申しなだめ、首をつなぎ奉つたに、(巻一第三P28)

⑦あはれ例の重盛が世をへうするやうに振舞ふものかな！(巻一第六P44)

右の例のうち「重盛が」の表現四例中、④⑤⑥の三例は重盛自身の言葉、即ち自称表現であり、残る一例⑦は父清盛の言葉、それも重盛への憤りの言葉に使われている。一方、「重盛の」の例中、①②は語り手喜一検校からの、③は重盛に名字を賜つた重宗の、好意的な待遇表現と見なされる。清盛の嫡男であり、悪役の父に対して思慮をそなえた善人として語られる重盛は、「天草本」では「の」で語られる存在と思われる。

○宰相

①兼康は宰相のかへり聞かれうずるところを恐れて、道すがらもさまさまにいたはり慰め奉つた。(巻一第七P58)

②少将いとな泣いそ宰相のさてござれば、(巻一第五P37)

③女房たちはかなはぬものゆゑなほもただ宰相の申されいかしと

天草本平家物語における主格表現——格助詞「の」「が」を中心に——

歎かれた。(巻一第七P57)

④あの少将がことを宰相のあながちに歎かるるが不便にござる。(巻一第十P71)

⑤あはれ例の宰相がものに心得ぬととみに返事もせられいで、(巻一第五P38)

「宰相が」の表現⑤は、やはり清盛の言葉に出てくるものであつて、①から④の「宰相の」は語り手や、他の登場人物からの待遇であり、述語部分には敬意表現が随伴されている。

○成親卿(大納言)

①成親卿の軍兵を集めらるるも院宣とてこそ呼ばせらるれ、(巻一第三P22)

②大納言のゐられたうしろの障子をざつとあけられたを見らるれば、(巻一第三P27)

③ある時兼康を召してこれより成親卿のござる備前の有木の別所へはいかほどの道ぞと、問はれたれば、(巻一第七P59)

④近いを遠う言ふは、成親卿のござる所をわれに知らせまいとてこそ申すらうとて、(巻一第七P59)

⑤とてものに成親卿の果てられた様体と、少将の鬼界が島へまた流されたことをも語りあれ。(巻一第八P59)P60)

⑥それより父大納言殿の住まれた所をたづね入つてみらるるに、(巻一第十一P77)

⑦成親が切られうずるにおいては、少将とてまかひない命生きて何につかまつらうぞ？(巻一第五P41)

成親卿が「が」で主格に立っている例は⑦のみである。この例は、子の少将が自分の助命を清盛に嘆願してくれた宰相に語りかける場面であり、父たる成親卿は肉親として自己に凝せられて表現されているのである。この例文の直前に「成親がこと」という、同じく少将の言葉があるのも事情を等しくするものである。外に向って肉親を表現する待遇意識であろう。「の」で表現されている用例のうち、①は行綱が謀叛を清盛に密告する場面、③④は少将が味方に父成親卿の配流先を尋ねる場面、②⑤⑥は語り手と聞き手の言葉である。少将が父を語る場合、味方の下臣には「の」、外部の者には「が」と使いわけをしている点が注目される。話し場の違いによって、「の」「が」両助詞が使い分けられる一例である。

○俊寛

①俊寛の幼うより不便にして召し使はれた童があつたが、(巻一第十二P83)

②俊寛がかやうになるといふも、御辺の父大納言殿のよしない謀叛のゆゑぢや。(巻一第十P74)

「俊寛の」の例は語り手の表現であるが、この文脈は下臣の有士を説明するものであり主従関係を明示する意識とも考えられ、この「の」に語り手の積極的な感情表出を求めることは無理である。「俊寛が」の表現は自称表現であり、この二例のみからは、「天草本」における俊寛の待遇表現上の位置を定めることはできない。

○妓王

①とどめおかせらるるならば、妓王の思はれうずする心のうちも恥

かしうござらうず。(巻二第一P96)

②ただし妓王があるをばかるか？(巻二第一P97)

③そのうへ妓王があらうずるところは神ともいへ、仏ともいへかなふまい。(巻二第一P95)

④けふの見参はあるまじことであつたを妓王が申しすむるによつて見参はしつ。(巻二第一P95)

「妓王が」三例は全て清盛の言葉であり、「妓王の」という表現は、仏御前の言葉である。両者の妓王への感情価値の差が歴然としている。男性中心の権力機構に翻弄される女性に対して、語り手はマイナスの待遇をするとは思えないが、「の」の使用だけからは判然としない。仏御前からは終始一貫して同情的に、あるいは運命を共同にするものとして表現されている点が目立つ。

○仲綱

①仲綱の言はれたは、ただ今ここで鶏がなくなれば、(巻二第四P123)

②馬ゆゑに仲綱が日本国の笑ひ草にならうことが無念な、(巻二第三P117)

③大手からむかふ若大衆には仲綱などが大将になって、これも直甲が千人あまりあつたと申す。(巻二第四P123)

①の「仲綱の」は会話引用を示す文脈に用いられ、語り手の待遇意識なしとはし得ない。「仲綱が」の例で②は自称だが、③は語り手の言葉であり、①と合致しない。ただ③は仲綱一人が主語ではなく、「仲綱など」となっている。「ロドリゲス大文典」では「話しことは

でも書きこばでも結合の為に用いられる接続詞の中に「*And*」等）を挙げ、「類似のもの」を示すと説明するが、感情価値には言及しない。²²「天草本」で人名に「など」が付着して複数化されたものが主語となつている例は、

●地頭・守護などがあやしむによつて、（巻四第二十八P404）

●大矢の俊長、五智院の但馬などが射る矢（巻二第五P126）

●さればこそこのことなきこえたあかつきお乳母などが心をさなうて具し奉つて出たか、（巻二第七P137）

などが、採集した用例から挙げられる。いずれも「が」で主格が表示されてはいるが、敬意が見られないからと言って、逆に軽卑感も明白ではない。「などが」の形式に待遇意識を結び付けることは即断に過ぎるであろう。

○文覚上人

①高雄の文覚上人の申しすめられたゆゑときこえた（巻二第九P144）

②頼朝にある時文覚の申されたは、（巻二第九P144）

③いかに北条文覚が頼朝に忠をつくしまらしたことは御辺かねて

ごらうぜられたれば、（巻四第二十六P388）

「文覚の」はいずれも語り手、「文覚が」は自称表現。巻四の後半で六代の助命をめぐって活躍し、頼朝に忠誠をつくした文覚上人は、語り手からは「の」で評価すべき人物と目されているようである。

○頼朝（鎌倉殿）

①頼朝の謀叛をおこさせられた由来をもお語りあれ、（巻二第九P

143）

②文覚のすすめによつて頼朝の謀叛をおこさせられたこと、（巻二第九P143）

③鎌倉殿のまづお使ひに佐々木は何とたづねさせられたれば、（巻四第二P237）

④なかんづく頼朝のかへり聞かせられうずるところも穩便ならぬ儀ちやと申せば、（巻四第十八P342）

⑤大臣殿の父子をば頼朝のござつた所から庭一つ隔てて、（巻四第二十一P361）

⑥二の宮位につけ奉らうとはかつたれども頼朝のござる間は申しも出さず、（巻四第二十八P407）

⑦関より東は頼朝のござれば、申すに及ばず、（巻四第二十三P368）

⑧頼朝がかへり聞かうずるところもあるぞ巻第十三P221）

⑨これはいかなこと？ 頼朝がゐながら謀をめぐらせばこそ、平家は滅びたれ、（巻四第二P355）

「頼朝が」の表現のうち、⑧は降伏を説く下臣兼平に対し木曾が激昂して合戦の命を下す場面で、頼朝への強い対抗意識が感ぜられる。残る一例⑨は頼朝自身の表現である。「頼朝」の例のうち、①②は聞き手右馬之允の言葉と外題であり、③⑤⑥は語り手喜一検校、④は義経と梶原景時のいざこざをなだめる三浦の介の言葉、⑦は頼朝に討手向けられた義経の言葉である。従つて、自称の場合と、対抗意識という特殊な感情表現の他は全て、「の」で遇せられ、権力

の頂点に立つ人物への配慮が伺われる。

○維盛

- ① 維盛の落ちるれば、北の方をはじめ子たちの維盛を慕はれたこと(卷三第七P183)

② 維盛が存ずるには、足柄を打ち越えて、坂東で軍をせうと思うと言はれたれば、(卷一第十P149)

「維盛が」は自称表現。「維盛の」は目録の外題。目録の主格表現はやはり「の」「が」が両用されており、数的には「の」が圧倒的に多い。これは目録の文章が「……のこと」という連体修飾節を形成していることが一つの要因である。と共に、階級的に上位者の動向を意味する表現が殆どであり、従ってそこに「の」による待遇意識がはいり込む可能性が高い点が第一の要因である。目録で、「が」による主格表現をされている者は、

● 西光が首をうたれたこと、(卷一第三)

● 木曾が猫間殿にあうての無様(卷三第十一)

の様に、罪人あるいは狼藉者の場合が多いが、一方、

● 那須の与一が扇を射たこと(卷四第十七)

の様に、心情的には「の」で表現してもおかしくないところに「が」を使用してあることを考慮すると、目録の主格表現も本文に準じた多様性が有ると解さねばならない。

○木曾殿

① 木曾殿の言はるるは…(卷三第五P174)

② そこで木曾殿の言はれたは…(卷三第三P164)

③ 木曾殿の言はれたは平家は大勢で下るほどに、(卷三第三P164)

④ 木曾殿のお下りあるに矢を一つ射かけませいと(卷三第十二P212)

⑤ 木曾殿の言はれたは…(卷四第四P245)

⑥ 木曾殿の言はれたは…(卷四第四P246)

⑦ また木曾殿が火燧が城におかれた齋明威儀師謀叛をおこし、(卷三第二P159)

⑧ 木曾殿が言はれたは…(卷三第三P168)

⑨ 木曾殿が見られて、(卷三第十二P216)

右の例中、②③⑤⑥と⑧では構文は同様だが、「の」「が」が両用されており、この点、両助詞の使い分けはなされていないかに見える。が、前述した如く「木曾」と「木曾殿」との使い分けと、それに応ずる「の」「が」の使用には注目すべき事実がある。先ず、木曾義仲が「木曾殿」と敬称の接尾辞を付けて主語に立てられる場合には「の」(従って、上記⑦⑧⑨はこの分類では例外となる)、「木曾」と敬称なしの場合、全て「が」で主格が表示される。「木曾殿の」式の表現は「木曾殿の言はれたは」の如く、会話引用を示す、語り手の言葉として使われている例が多く、④例の如く、敵方の武将の言葉にも出現する。これらの表現では「の」助詞と共に、述語部分に尊敬の助動詞が付随して用いられており、語り手や他の言語主体の待遇意識の反映ありと見てよからう。敵方から尊敬表現をなされている例は④の他にも、

●日本国にきこえさせられた木曾殿を為久かうこそ討ち奉れと言
うて(巻四第四P248)

の例がある。さらに「木曾殿が」式表現にも後続する動詞には尊敬の助動詞が伴われ、この「が」に積極的な軽卓感は見られない。従って、「木曾が」と「木曾殿が」との二種の「が」には感情価値の差異が存する。

ところで、木曾義仲が「木曾殿の・が十尊敬表現」の形式で表現されるのは、彼が旭將軍として活躍する場面においてであり、彼の政権安定後、暴挙が目立つところになると、次の様に一変した表現になる。

●まことに木曾が主上、法皇のわけを知らないでむざとしたことを言ったことはをかしいことぢや。(巻三第十三P224)

●あはや木曾が参るぞ何たる悪行をかつかまつらうずらうとあつて君も臣も恐れをのかせらるるところに(巻四第三P238)

右の例の「木曾が」には明らかに、困惑や恐怖などの感情を抱いた言語主体の待遇意識が託されている。

さらに、義仲討死の場面では再び「木曾殿の」の形式とそれに伴なう敬意表現が復活する。それは「天草本」巻四第四章、

●さらばよい敵ぞ同じうは大勢の中でこそ討死せうずれとまっ先に進まれた。

と武士としての最期を決意するあたりからである。この前には義仲の動作には、当初の尊敬表現が脱落しており、これ以後再び登場するのである。そういう場面の「木曾殿の」式表現は、上記⑤⑥など

天草本平家物語における主格表現——格助詞「の」「が」を中心に——

である。寿岳童子氏は「その悲劇的な運命に襟を正すように再び」の「待遇になる」と説かれるのであるが、木曾が「の」待遇になつても、

木曾自身の間人性に向けられたのではなく、語り手の木曾への意識が平家後半では、彼の運命を中心としたもので形成され、そこに語り手の待遇が存するのである。とすると、木曾が英雄視されていた時の「木曾殿の」と討死する時の「木曾殿の」とでは、形式は同じでも、その感情価値にはかなりの隔りがあると言わねばならない。

この経緯を端的に示すのが「天草本」巻三と巻四の目録である。

●巻三第一、木曾殿の由来と、平家に対して謀叛をおこされ合戦せられたこと。

●巻三第五、木曾軍の評議をして、比叡の山を語らはるれば、比叡の山も木曾にくみしたこと。

●巻三第十一、木曾が猫間殿にあうての無駄と、車に乗って牛にひきずられたこと。

●巻四第一、頼朝木曾が狼藉を聞いてそれをしづむるために、範頼義経を上せられたこと。

●巻四第二、範頼、義経木曾が討手に上らるること…(中略)

●巻四第四、木曾兼平にゆきやうてまた合戦をし、つひにはみな討死のこと。

「天草本」における木曾義仲の登場から最期までを目録を使って示すと右の様になる。これでは特に「の」待遇から「が」待遇への変遷が看取できる。ただ、再び「の」待遇へ復活する現象はこれからは明確に指摘し得ない。以上長くなったが、「木曾」「木曾殿」の二

種の主語は、感情価値の変化に従って、実に見事に主格表現が区別されているのである。このような配慮は平家物語諸本の中でも、特に天草版に著しいのではないか。前記①から⑨までの用例に対応する詞章を「覚一本」「百二十句本」で調査してみると、両本での「の」「が」による使い分けは明確でなく、「百二十句本」では主格は殆ど無表記である。「天草本」では、他の諸本に比べ、格表示はかなり厳密に施され、この点では近代語的性格が強いと言え、しかもその格表示に、「の」「が」の場合に限って言えば、言語主体の感情価値を織りまぜてあるのである。「天草本」の主格表現は、格表示という論理的機能の顕現と、感情移入という点からの使い分け（少なくとも特定人物に対しては）とが著しいところに大きな特色を有すると言えらる。

○猫殿、猫間殿

- ①猫間殿とはえ言はいで、猫殿のはじめておちゃったぞ…もてなしまいらせいと言うと、(卷三第十一 P 206)
 - ②そのころ猫間殿といふ人があつたが、木曾に談合せうことがあると言うて、木曾が宿所へゆかれたれば、(卷三第十一 P 206)
 - ③猫間殿が帰られてから、木曾も出仕をせうと言うて出立つたが、(卷三第十一 P 207)
- ①の「の」の例は猫間殿をからかう場面であり、わざとらしい態勢が目立つ。②③は語り手の言葉である。特に明白な待遇意識は指摘し得ない。

○義経

①院の御所には義経の参つて、守護し奉らるると聞いたれば、(卷四第四 P 242)

②吉野法師このことを聞いて義経のこの山に籠られたといふにいざ討ちとつて、頼朝の見参に入らうとて、(卷四第二十五 P 381)

③去んぬる一日は義経の申さるるによつて鎮西將軍たらうずるとおん下し文をなされ、(卷四第二十五 P 382)

④兼倉左兵衛の佐頼朝が舍弟義経が参つてござると、奏聞させられいと申したれば、(卷四第三 P 240)

⑤義経がなからうにこそ…まさなや、君は大将軍でござると申せば、(卷四第十八 P 342)

⑥殿ばら軍しに來た義経がまづ勝浦についたことのためたさよ。(卷四第十六 P 329)

「義経が」の表現④⑤⑥は全て自称であり、「義経の」の表現と述語部分での尊敬表現に語り手の意識が見られる。

○平大納言

①平大納言の配所におもむかること(卷四第二十二 P 368 目録)

②また世にもはばかりず、平大納言が聲にとるも心得ぬ。(卷四第二十二 P 355)

①の「平大納言の」の例は目録、②の「平大納言が」は義経の高名を伝え聞いた頼朝の心安からぬ思いを述べたものである。この二例からは、語り手の平大納言に対する待遇意識は判然しない。

以上、「の」「が」両助詞の使い分けに従って「天草本」に登場する人名を(イ)(ロ)の三通りに分類し説明を加えてきたが、要約すると次の様になろう。

先ず、「の」「が」の使い分けには、かなり形式的、規範的なところがある。具体的には、「の」は皇室関係者、公卿、権威ある支配者などが主語に立つ場合、「が」は他の一般の武士の場合に使われている。そして、この様な場合の述語相当部分には、「の」が主格を表示していれば、必ずと言ってよい程、何らかの尊敬表現が現われる。さらにその尊敬表現が「の」グループの中で使い分けられている。従って「の」に敬意が認められると言っても、文脈的な現実即して見た場合には、敬意を含んだ種々の接頭、接尾語、動詞、助動詞などが用いられている文での主格表示を担っているとなればならぬのである。待遇表現の体系の中では、先ず、「の」によって「が」待遇と大別され、後続の表現でさらに細別する方法である。一方、「が」が主格を表示すれば、後出の述語部分には、尊敬表現は使われず、待遇的には無色の常体の動詞か、謙讓語かが使われている。人名を挙げると、つまり異なり語数で主語を挙げると、登場する大半の者がここに属する。

次に、本来「の」待遇に属する人物が「が」で主格表示されるのは自称が殆どであるが、自分より、より高度の社会的位層にいる人物の言葉にも出てくる。従って「の」「が」の使い分けには一応の固定性があるものの、場面での使い分けという相対的性格も有る。また表現者も、表現される人物も同一であっても、その人物に対する

天草本平家物語における主格表現——格助詞「の」「が」を中心に——

感情価値が変化すれば、それに応じて待遇が変化するのは当然であるが、実際には待遇が低落する場合が多い。

さらに、「天草本」の「が」は待遇上よりも、主格表示という文機能上の要請によって使用されたと思われるものが多いが、木曾の例や、少将と康頼の例に見られる如く、場面の特殊性に起因する、明白な待遇表現もある。

「の」「が」に関する国語資料を検討すると、「の」の敬意を説明する資料よりも、「が」の卑下感を説くものが多い。「天草本」での実際の文章でも「の」で積極的に敬意を感じさせる文脈より、「が」使用の文脈での卑下感が印象に残る。「の」「が」の尊卑説が、「が」の自己卑下ないし強示性から来る軽卑感が先ず生じ、その反射として「の」に敬意が附与されたと一般に説かれることの傍証と言えようか。

三、天草本の原拠本研究について

「天草本」の原拠本に関する研究の現状について、福島邦道氏は「ギリシタン資料と国語研究」(昭和四十八年)の中で次の様に述べられる。

この平家物語が日本のいかなる本を原拠としたかについて、すでに土井博士「近古の国語」(六ページ)などで、百二十句本によりつつも、流布本系によつたところのあることが明らかにされたが、清瀬良一氏「天草版平家物語の原拠覚書」(国文学放

三十三号、昭和三十九年三月）は、さらにそれを精密におし進めたものである。近時、百二十句本も二種複製されたことにより、その研究もいちじるしく高められてきているのである。

右の引用文中の土井忠生氏の説は、

灌頂巻を別に立てない系統の百二十句本に據つてゐるが、ただ第一巻及び第二巻最初の一章「祇王清盛に愛せられた事」等は、私の照合した百二十句本（京都府立図書館蔵）とは一致しないで、別系統の流布本の本文に近い。流布本の何れと一致するかは未だ確かめてゐない。²⁴

と、概様ではあるが、先駆的に述べられたものである。この原拠本の二元性を口語訳の意図に敷衍されるのが清瀬良一氏である。氏は先ず、「天草本」の巻第二第二章に収められる祇王の条の原拠を検討された。²⁵「天草本」の巻一は古典平家の巻一から巻二までの抄訳であるが、古典平家の巻一所在の「祇王」の条が、「天草本」では巻一第一に編纂されている。この事実を天草版成立過程究明の手懸りとして、本文の異同を調査し、その結果、覚一系諸本のうち、西教寺文庫本を注目すべきテキストとして推されたのである。その後、氏の原拠本探究はさらに進み、福島氏引用の論文では次の如き成果を見た。

一、巻一 の原拠本は、古態の中に新態の詞章の書きこみのある本で、随時、その新態の語句を取り入れつつ口訳が進められたのではないか。即ち、原拠本そのものに新旧の詞章が混在しているという二元性を推定するのである。

二、「天草本」巻第一「祇王」の条は、西教寺文庫本に見られるような詞章を骨子としつつもかなり複雑な詞章変化を経たものではないか。

三、「天草本」巻第二章以下巻四の終章までの原拠本は、従来百二十句本に近いとされていたが、それも古態の百二十句本の詞章が反映していると思われる。

清瀬氏の他には、阪田雪子氏の「天草本」翻字作業に付随した報告がある。氏は「ハビヤン抄キリシタン版平家物語」の札記で、「天草本」は百二十句本諸本のうち、慶大本²⁶に対して、著しく近い關係に立つことと、「天草本」を百二十句本に近いということだけでは不十分であることを説かれた。また、「天草本」巻四第十三の構文は、「天草本」と慶大本とのみが一致した展開を見せていること、道行文的な重衡東下りの条の冒頭は、慶大本とほぼ同一の文章であることとを校合によって示された。

清瀬氏の言われる「古態の百二十句本」は阪田氏の調査を考へ合わせると、この斯道文庫蔵の百二十句本に近いようである。斯道文庫本は、従来の百二十句諸本の伝本中、最古態を示すと山下宏明氏は説かれる。²⁷氏の調査によると、百二十句諸本はその形態などから次の三類に分類される。

● 甲類本 斯道本、巻八欠。十一冊現存。漢字片仮名交り。書写は室町末。（安部隆一説）

● 乙類本 小城本、巻十一欠。十一冊現存。片仮名交り九行書。慶長頃の書写。（島津忠夫説）

●丙類本 平仮名本で次の五本の存在が知られる。

- (1) 鍋島家旧蔵本、江戸初期写書か。
- (2) 青谿書屋旧蔵本、江戸初期の写し。(高橋貞一説)
- (3) 京都本、江戸初期写書(高橋説)
- (4) 国会図書館蔵本、江戸初期の写し。
- (5) 久原本、江戸中期の写し。

右諸本のうち、従来知られていたのは丙類本諸本であり、いずれも江戸初期から中期の書写にかかるといえる。これに対し、斯道文庫本は室町後期書写と言われ、現存百二十句本では最古の伝本である。またその表記も丙類本がいずれも平仮名文であるのに対し、屋代本に類似した漢字仮名、しかも片仮名交り文であるという顕著な特徴を持つ。松本隆信氏は、「百二十句の組織をとることににおいては全く同じであるが、本文には記事の増減をはじめ、詞章の異同を多く含み、百二十句本の成立過程や屋代本、平松本、鎌倉本等の隣接諸本との関係を考える上に新しい資料を提供することができる」と説明され、平家諸本の中でも貴重な伝本と言えらる。ただ、この斯道文庫本は巻八を欠巻にしており、この点瑕疵がある。

以上、先学諸家の研究をまとめてきたが、キリシタン語学内での「天草本」の原拠本調査と、平家諸伝本、とりわけ百二十句諸本の本文異同の調査結果とを勘案すれば、「天草本」の巻一第一以降は斯道文庫本、巻一及び巻二第一までは寛一本系統のものを原拠テキストに想定して調査を進めるのが、現状では妥当であろう。「天草本」をはじめ、他のキリシタン資料内部に原拠テキストに関する記録が見

天草本平家物語における主格表現——格助詞「の」「が」を中心に——

い出せないのが、右の本文に依拠した理由も明確にし得ない。ただ口訳にあたって、事前に数本のテキストが用意され選択が行なわれたのなら、難解な語句を避け、詩的韻律文を削除した、庶民的な詞章を持つと言われる百二十句本が採択されたとも考えられる。「天草本」の口訳基準は終始一貫しているのではなく、口訳の存立状態や敬語表現には、原文平家の巻八までと巻九以後とはかなりのゆれが見られるところを見ると、頭初座右に置かれたテキストが、より口語的な、つまり、「世話」に和らげ易い詞章を持ったテキストに替えられたことは想像に難くない。原拠本が単一のものであるか、複数のものであるか、なお追究すべき点が残るが、もし複数であれば、右の様な事情が充分想定できるのである。

四、天草本と原拠本との「の」「が」の対比

「天草本」の巻一第一までを寛一本(テキストは石波古典大系本)、巻一第二以後を百二十句本(テキストは汲古書院刊、斯道文庫本)によって、「の」「が」両助詞がどの様な異同を示すか調査する。但し、斯道本は巻八欠巻であるから調査対象から除外した。

「天草本」と寛一本、「天草本」と百二十句本との対応関係は大きく次の八点に分けられる。以下、その分類と用例を示す。

- ① 両本とも「の」で主格が表示されるもの(二五〇例)
寛いまはよそにてだにも、此有さまを見をくる者のなかりけるかなしきよとてなけれれば、(P180)

〔天〕今はよそながらもこのありさまを見送る者のないことの悲しき

よとして泣かれたれば、(卷一第七P54)

〔百〕院ノ御所ニハ義経ノ参リ玉ヒテ守護シ奉ルト聞ヘシカバ、(P4

92)

〔天〕院の御所には義経の参つて、守護し奉らるると聞いたれば、(卷

第四P242)

② 両本とも「が」で主格が表示されるもの(一六七例)

〔覚〕されば汝が来たれるもただ夢とのみこそおほゆれ(P235)

〔天〕さればその方が来たこともただ夢とばかり思ふ、(卷一第十二P

87)

〔百〕又、代ニモ憚ラス大納言カ鞆ニトルモ心得ス(P702)

〔天〕また世にもはばからず、平大納言が鞆にとるも心得ぬ(卷四第二

十P355)

③ 原拠本「の」が「天草本」では「が」に替っているもの。(五

五例)

〔覚〕うしろのかたより足をとのたからかにしければ、(P156)

〔天〕うしろぞ方から足音が高うきこえたれば、(卷一第三P156)

〔百〕此三年ハ高ウタニモ笑サリシ人々ノ声ヲ揚テソ咲ヒケル(P7

50)

〔天〕この三年は高うさへ笑はなんだ人々が声をあげて叫ばれた。(卷

第四二十六P384)

④ 原拠本「が」が「天草本」では「の」に替っているもの。(一

例)

〔覚〕入道「つねにもまいらぬものが、参じたるは何事ぞあれきけ」と

て(P151)

〔天〕清盛常にも来ぬ者の来たは何ことぞ? あれ聞けと言うて。(卷

一第三P21)

⑤ 原拠本では主格表記が無く、「天草本」では「の」となってい

るもの。(五三例)

〔覚〕され共その中に源左衛門尉信俊と云侍一人、情ことにふかかり

ければ、(P187)

〔天〕されどもその中に信俊といふ侍一人なさけの深い者であったに

よつて(第一第八P61)

〔百〕廿三騎ノ者トモヲ中ニ取籠テ火出ルホトソ聞ケル、(P527)

〔天〕二十三騎の者どもを中にとり籠めて火の出るほど戦へば、(卷四

第七P265)

⑥ 原拠本では主格表記が無く、「天草本」では「が」となってい

るもの。(三四二例)

〔覚〕さやうの事あるべしともしらずして、けうくんしてまいらせつ

る事の心うさよ(P103)

〔天〕さやうのことがあらうとも知らいで、教訓して参らせたことの

心憂さよ、(卷一第一P102)

〔百〕六波羅ニハ軍兵馳集テ騒クトモナカリケリ、(P273)

〔天〕六波羅には軍兵どもが馳せ集つてゐたによつて騒ぐこともな

かった、(卷二第四P123)

⑦ 原拠本では他の助詞(主として係助詞)が使われるが、「天草

本」では「の」「が」に替っているもの。(五六例)

〔「の」に替っているもの四例〕

〔「が」に替っているもの五二例〕

〔覚〕他人の口よりもれぬ先にかへり忠して命いかうと思心ぞつつきにける。(P151)

〔天〕他人の口よりもれぬ先に返り忠して命生かうと思ふ心がついた

によつて (巻一第三P21)

〔百〕高倉面ノ小門ニ人モナキ間ニ走り出ントスル所ニ (P253)

〔天〕高倉おもての小門に人のない間に走り出うとするところに (巻

二第二P112)

この他に「ヤ」「カ」「コン」などの係助詞が「の」もしくは「が」に交替している。

⑧ 対応文が無いが、対応関係の明確でないもの。(二〇八例)

〔天〕その鬼界が島の流人どもを清盛の許された様をお語りあれ (巻

一第十P70)

これは、右馬之允が話の続きを催足するもので、「天草本」に独自のものであり、原拠テキストに対応文を欠くことは無論である。

〔覚〕京中の上下もてなす事なのめならず (P95)

〔天〕京中の上下もてなすことは限りがなかった (巻二第一P94)

これは文語的な「なのめならず」を「限りがなかった」と口訳した結果であり、原文に格表示が無用であった例である。この対応関係が明確でない場合は、文語独特の言いまわしを、格関係を明確化し、言わば論理的な表現に口訳するところに起因し、その分布は「天

草本」全般に渡っている。が、率から言えば、やはり巻一の第一から第三まで(覚一本の巻一に対応)に高い頻度で現われる。口訳の不馴れが将来したものであろうか。「天草本」全体の抄訳量は平均的になっておらず、その上、大体において前半の部分(巻一から巻八ぐらいまで)には、口語的性格の語句が多い。反面、その分だけ、原文の詞章との距離も生じる訳である。後半の部分では逐語訳が多く、重衡東下りの条などは前述した如く斯道文庫本とほぼ同様の文章が使用されている。従つて、原文との言いまわしが近似しており、付表2からわかる様に巻九以下では用例数に比して対応関係が明確でない例の割合が少ない。厳密に言えば、「天草本」巻一から巻三までのページ数と巻四のページ数は大体同量と見てよく、「の」「が」の用例数も、それに比例して同程度出現するのであるが、原拠文との対応関係が不明確な表現が前半の部分には後半の約四倍の率で出現する。それ程、原文からの逸脱が前半において大きく、後半において小さいのである。

さて、付表1、付表2、及び前記の対応関係の分類に基づいて検討すると「天草本」と原拠本の「の」「が」による主格表示には次の様な特色が指摘できる。

①原拠本と「天草本」では「の」「が」の数値上の優劣が逆になること。つまり、原拠本では「の」、「天草本」では「が」がそれぞれ約二倍の割合で優勢を示す。これは、原拠本では、単文での主語が格表示される場合が少なく、連体修飾節中での主語が「の」によつ

て格表示される傾向にあったことと、「天草本」で「が」が優勢を示すのは、原拠本の主格無表記及び係助詞による格表示を、主として「が」で行なったことに拠る。ちなみに、「天草本」での「が」の例数は原拠本の四倍強である。

②原拠本の「の」の用法のうち、過半数が連体修飾節中の主格助詞として使われており所謂、従属句を構成するものである。この特徴は「天草本」ではさらに顕著になり、「の」の全用法のきを占めるに至る。

③原拠本の「が」の用法のうち、連体修飾節中の主格表示は半数に至らず、「天草本」では以下と、全用例に占める割合が減少し、「が」の純粋な主格助詞としての機能が発達していく様相を見せる。

④両本で「の」と「が」の交替が見られる場合、「の」が「が」に替えられ、その逆は無いと言える。ただ一例、例外がある。「の」が「が」に替えられる場合、複文の場合ではなく、単文的な主格用法の「の」であることが殆どである。つまり、節中の「の」は安定しており、それ以外の「の」が不安定で、「が」に代替されやすかった。

⑤「の」「が」両助詞ともに、原拠本で、連体修飾節中の主語を表示する場合は、「天草本」でも同じ用法であり、節を構成しない場合の主格表示であれば、「天草本」でも同様の用法である。つまり両本の対応文は主述関係から見た場合に、構造上には大差がなく、「天草本」の主述関係は原拠本に忠実であると言える。一般に遂

語訳がなされたことを裏付ける特色であろう。

以上の五点は、院政、鎌倉期以降、「の」は連体格に、「が」は主格にと、両助詞の文法的機能が分岐する通時的様相の枠内にあるもので、数値からの判断という大局的な立場からは「天草本」における「の」「が」は国語史の一般的趨勢から、それ程離れてはいないと言える。が、個々の例文からは今まで述べてきた様な特色が種々存するのであって、本稿で取り挙げなかった「天草本」の普通名詞（人を指す場合の）に承接した「の」「が」の用法を検討し、「の」「が」を中心とした「天草本」での待遇表現体系と、原拠本でのそれとを比較することは今後に残される。

（昭和52年12月）

注1 「伊弉保物語」と「金句集」は一五九三（文禄二年）。三部とも天草学林より刊行。

注2 「世話」は日葡辞書によると、「Xeya Xeqenni fayaru ooba」とあり、宣教師たちが生硬な日本語を避け、世間一般の平易な言葉で布教を行なうとしたことが伺われる。

注3 ハビアン緒言による。

注4 「天草本平家物語」の原拠本については後述する。

注5 橋本進吉「吉利支丹教義の研究」、

土井忠生「吉利支丹語学の研究」、

吉田澄夫「天草版金句集の研究」、

なお、個々の語句の綴りに関する問題点については、

- 森田武「吉利支丹資料のローマ字綴」国語学20輯がある。
- 注6 従って、以下「の」「が」の用法は説明がない限り主格用法のものである。
- 注7 「伊曾保物語」の用例数は、京都大学文学部国語国文学研究室編の索引による。
- 注8 清瀬良一「天草版平家物語における口語訳の存立状態」国語学74
- 注9 〈平家〉は天草版の原拠と思われる古典平家のことを指す。
- 注10 この数値は、全用例ではなく「天草本」の用例と対応している例数を示す。
- 注11 この点については後述する。
- 注12 以下、「天草本」の引用文は、亀井高孝、阪田雪子翻字本による。ページ数は原文のものである。
- 注13 この傾向は富士谷成章はじめ、諸家の指摘してきた通りである。
- 注14 ここにいう主格表示は「の」「が」に関するもののみであり、他の格助詞は考慮に入れない。()内の数字は例数である。
- 注15 「ロドリケス日本大文典」の「助詞に接続する尊敬及び卑下の助辞に就いて」訳本五七九ページに細分類が示されている。
- 注16 清瀬良一「天草版平家物語における会話引用の言いかたについて」(「国文学攷」16号、S31)
- 注17 小林好日「助詞「が」の表現価値」(「国語と国文学」S31)
- 注18 このような立場は早く寿岳章子氏によって示された。「室町時代の「の・が」」(「国語国文」S33)
- 注19 木曾は他の武士に比べると階級は高いが、狼藉者として見られた場合は待遇は低下する。この点については後で詳述する。

- 注20 ②例は連体格用法の場合であるが、傍証として掲げる。
- 注21 木曾については、「が」の項でリストに載せたが「木曾殿」の表現は事情を異にしていると思われるので、細分した。
- 注22 訳本P476
- 注23 敬語講座第三巻「中世の敬語」所収「抄物・キリシタン資料の敬語」
- 注24 引用文は「国語科学講座」第四巻所収の「近古の国語」による。
- 注25 清瀬良一「天草版平家物語の原拠——「祇王」の場合について——」(「国文学攷」23号、S35)
- 注26 吉川弘文館発行。昭和四十一年。
- 注27 慶応大学附属研究所、斯道文庫蔵のものをさす。
- 注28 山下宏明「平家物語百二十句本再考」(「古典文庫」平家物語四所収)
- 注29 汲古書院発行、「百二十句本平家物語」の別冊に松本氏の解題がある。
- 注30 岩波大系本「平家物語」下解説。
- 注31 清瀬良一前掲論文。(注8)

附表1 「天草本平家の「の」「が」(主格)の分布状態」

注1

「+動」の「動」は動詞を意味し、「の」「が」に対応する述語部分が従属句を構成していないもの。

注2

「+節」は「の」「が」に対応する述語部分が連体修飾節を形成しているもの。

注3

「+形」は形容詞が後続する場合で()内の数値は連体修飾節を形成しているもの。

原 規 本	天 草 本	対 比 ス テ ト	の 総 数	+ 動	+ 節	+ 形	そ の 他	が 総 数	+ 動	+ 節	+ 形	そ の 他
卷 1	I 1 } 3	寛 本	19	8	9	2(1)	0	26	18	4	2(0)	2(0)
2	I 3 } 9		46	14	29	3(3)	0	76	52	14	7(0)	3(0)
3	I 10 } 12		33	4	24	4(4)	1(1)	35	18	8	7(1)	2(0)
①	II 1	百 二 十 句 本	13	3	8	2(2)	0	31	21	6	4(0)	0
4	II 2 } 8		21	8	11	2(2)	0	114	91	17	5(0)	1(0)
5	II 9 } 10		10	2	6	2(2)	0	31	27	3	1(0)	0
6	III 1		2	2	0	0	0	9	6	1	2(1)	0
7	III 2 } 8	欠 卷	31	17	12	2(2)	0	99	78	9	12(2)	0
8	III 9 } 13		29	8	15	5(5)	1(0)	74	52	12	8(2)	2(0)
8	IV 1		1	0	1	0	0	8	6	0	1(0)	1(0)
9	IV 2 } 10		51	12	30	9(4)	0	109	81	15	9(1)	4(0)
10	IV 10マ } 15	百 二 十 句 本	28	12	15	1(1)	0	67	40	12	11(0)	4(0)
11	IV 16 } 20		33	9	20	4(3)	0	61	41	8	12(2)	0
12	IV 21 } 28		49	19	26	1(1)	3(0)	38	29	7	2(0)	0
				366	118	206	37(30)	5(1)	778	560	116	83(9)

天草本平家物語における主格表現——格助詞「の」「が」を中心に——

附表2 「天草本の用例に対応する原拠本での「の」「が」(主格)の分布状態)

原 拠 本	テキ スト	の 総 数	う ち わ け	+	+	+	+	が 総 数	う ち わ け	+	+	+	+	+	無 表 記	そ の 他 の 詞	対 応 せ ず	計
卷 1	覚	14	9	2	5	2 (1)	0	2	0	0	0	0	0	0	3	0	7	19
			5	3	1	1 (0)	0		2	2	0	0	0	10	1	8	26	
2	—	41	34	11	22	0	1	19	1	0	1	0	0	0	4	1	6	46
			7	5	1	1 (0)	0		18	8	10	0	0	36	6	9	76	
3	本	33	28	4	19	3 (3)	2	14	0	0	0	0	0	0	1	0	4	33
			5	3	0	1 (0)	1		14	5	8	0	1	12	1	3	35	
①	—	10	9	1	5	3 (3)	0	8	0	0	0	0	0	1	1	2	13	
			1	0	1	0	0		8	3	5	0	0	14	4	4	31	
4	—	21	14	6	8	0	0	29	0	0	0	0	0	6	1	0	21	
			7	5	1	1 (1)	0		29	22	7	0	0	57	10	11	114	
5	—	13	7	2	3	2 (1)	0	6	0	0	0	0	0	1	0	2	10	
			6	4	2	0	0		6	5	1	0	0	15	1	3	31	
6	百	2	2	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
			0	0	0	0	0		2	2	0	0	0	5	0	2	9	
7	二	21	15	9	6	0	0	9	0	0	0	0	0	11	0	5	31	
			6	5	1	0	0		9	7	2	0	0	62	3	19	99	
8	十																	
9	本	43	40	9	24	7 (2)	0	38	0	0	0	0	0	9	1	1	51	
			3	3	0	0	0		38	24	12	0	2	49	14	5	109	
10	(斯道本)	33	25	12	11	2 (2)	0	13	0	0	0	0	0	3	0	0	28	
			8	8	0	0	0		13	4	9	0	0	35	4	7	67	
11	—	30	26	8	17	1 (0)	0	17	0	0	0	0	0	7	0	0	33	
			4	4	0	0	0		17	7	6	4	0	29	6	5	61	
12	—	44	41	17	23	0	1	11	0	0	0	0	0	7	0	1	49	
			3	3	0	0	0		11	6	5	0	0	18	2	4	38	
		305	250	126	150	24 (3)	5	168	1	95	66	4	3	53	4	108	1032	
		55						167						352	52			

注1 「うちわけ」その他の欄で二段に分かれているものは上段が天草本の「の」、下段が「が」に対応するものである。

注2 「+動」とは「の」「が」に対応する述語部分が従属句を構成していないもの。「+節」及び「+形」の()内の数値は、従属句を構成し、連体修飾節の主格表示の例を示す。

注3 最右欄の合計はそのまま天草本での各巻の「の」「が」の合計に相当する。